

男のきもの

「第一章」着巧者が語る着こなしポリシー



日本人特有の「ナンバ」は
きものが着くずれない歩き方

古武術家・甲野善紀さん

袴に一本歯の下駄で

「道」とは実践から離れ、「術」は実践そのもの。これは中国哲学の教授から聞いた話で、たとえば、「武道」と「武術」がそれに当てはまるという。その伝でいけば、まさに武術、それも「古武術」を日々新たに展開しているのが、武術稽古研究会「松巖館」を主宰している甲野善紀さんである。

甲野さんの名前は、スポーツ界でもよく知られている*。古武術の術理に基づいた体のさばき方「ねじらない・ためない・うねらない」を体得したスポーツ選手たちが活躍しているからだ。

そのなかでも巨人の桑田真澄選手は、従来の「体をねじって踏ん張りパワーをためる」運動理論から、甲野さんの「古武術3ない」*式を身につけ、引退を勧告されていた三四歳の二〇〇二年九月に三年ぶり

*進学校で著名な東京・桐朋高校のバスケットボールチーム監督が甲野さんの古武術の動きを取り入れ、動き方、走り方を「ねじらない・ためない・うねらない」方式に徹底。その結果、飛躍的な成果を挙げた。

*先述した「ねじらない・ためない・うねらない」という三つの「ない」を、勝手に本書で命じた。



古武術の大家、甲野善紀さんの動きは静謐なのだが、底知れぬパワーが秘められている。常にきものに袴を着用しているのも、きもは甲野さんの肉体の一部のようだ。

の完投勝利を果たした。奇跡の復活と喧伝されたそのときの談話に、「投げたあとの疲労感が違い、肘、肩、腰に張りが出なかった」とある。この現象を簡単にいえば、体の特定の部分を酷使してパワーを出すのではなく、身体をバランスよく同時並行的に連鎖して動かすから、エネルギーの消耗が少なく、特定の部分に負担をかけることもなくなるらしい。

こうした体格、体力、筋力に頼らない古武術の動きは、スポーツの動きとは本質的に異なるもので、甲野さんは「質的に転換した動き」と説明する。

もっとも、私は古武術のことを書く任ではないから、ここではきものに關することの記述に留める。より詳しく知りたい方は、甲野さんのウェブサイトを、著作を読んでいただきたい。

甲野さん自身はいつもきものに袴。それに下駄。以前、松聲館にうかがったとき、玄関には一本歯が鎮座していた。一本歯の下駄で歩ける人、つまりそんな身体の使い方ができる人はいったいいま、何人いるだろうか。「一本歯で歩くと腰痛はなくなりますよ」と、甲野さんは笑って言うのだが。

* 松聲館ウェブサイト

<http://www.shouseikan.com/>

東京・池袋の西武百貨店「1111」3F
カレッジ、東京・新宿の朝日カルチャーセンターで講座も受け持つ。武術を語る 身体を通しての「学び」の原点（壮神社 一九八七年、徳間文庫所収）、『武術の創造力 技と術理から道具まで』（共著、PHP研究所 二〇〇三年）など、著書多数。

* もちろん普通は一本歯の下駄である。

ボタンが嫌い　　武道より先に、「きもの」ありき

松聲館へはきもの雑誌の取材^{*}でうかがい、ナンバの歩き方について教えてもらった。

そのナンバにいく前に、甲野さんのきもの観について聞いてみた。武術にかかわっているからきもの、なのかと思っていたら、その順序が逆だった。というのは、なんとか洋服を着なくてすむ職業につきたいと願っていたというのだ。幼児期から洋服になじめず、たまたまきものを着たときの解放感が気持ちよく、それ以来、きものを着続けてきたのだそうだ。

「昭和五三（一九七八）年の大晦日に、はじめて父のきものを着て明治神宮に行ったんです。そのきものを着た感じが、なんといったらいいのか、とても懐かしいんですよ。僕の気持ちにぴったり合ったというか、まるで、故郷に包まれた[†]ような不思議な感覚でしたな。と同時に、周囲にたくさんいる洋服姿の日本人が、ひどく異様で滑稽に見えたのです[†]」

そして、常にきものを着るようになってからは、所有していた唯一^た着のスーツも処分した。

それから、甲野さんがきものを選んだ大きな理由が、もうひとつ存

* 『家庭画報特選きものサロン』（世界文化社）二〇〇二年春号、175ページ
† きものおなじみレッスンの「歩き方」（文＝埴中）に掲載。

在していた。

「私はねえ、洋服についているあるものが、どうしようもなく嫌いなんですよ。そう、その名を口にするのもいやなんです。それは、芙蓉ふぶのような花の咲く植物と同じ音ですけれど」

え？ 牡丹ぼたん？ 釦ボタン？ と、こちらの頭のなかが一瞬、ぐるぐると回ったが、洋服についているボタンが大嫌いでその名を口にするのもイヤというから、徹底している。なにに起因しているかは不明だが、とにかく生理的にボタンが嫌いなのだとか。だから、必然的に、ボタンのついていないきものを選ぶことになる。失礼を承知で極端なことをいえば、甲野さんはきもの着用でしか生きていけないのである。

そんな甲野さんだから、たしかに着姿がしつくりと決まっている。この「決まり方」も、いわゆるきもの好きの男たちとは少々違っていて、なんと表現したらいいのか、「身体の一部がきもの」なのだとかいいようがない。むろん、きものに着られていないし、きもの自体がまったく浮いていない。しかし、こんなふうにも甲野さんはいう。

「よく、刀をもって出かれますし、きもの姿が珍しいんでしょね。道の角を曲がって女子高校生たちとばったり会ったとき、いつせいに噴き出されたこともあります（笑）。昔は警官の職務質問はしょっち

* 甲野さん自身は、たとえば結城や大島でないといけないとか、きもの素材へのこだわりはほとんどない。「日常着」としてのきものだからである。が、現在では織ることもできないような微細な緋の久留米緋を着ていたりする。それについて質問すると、「亡くなった主人の供養にもなりますから」と知り合いから贈られたものだぞつた。

ゆうでしたよ（笑）」

これが、現在の日本における「きもの状況」なのである。

きものに限らず、日本はこれから「どこ」へ行くのかという気分になるが、その最たるものが日本独特の「身体感覚」ではないだろうか。

古来、日本人は、手を振って歩かなかった

たとえば下駄で歩けなくなったりと、日本人の身体感覚がわずかに〇〇年の間に変質しているらしいのである。

「日本人は明治時代まで、いまのような歩き方をしてなかつたんです。いま、左手と右足を同時に前に出し、次に右手と左足を出しますね。これは、一歩ごとに体をねじって歩いているわけですから、当然、きものもゆるんできます。」

しかし本来、日本人が日常にきものを着ていた時代には、手を振って歩きませんでしたし、もし振るとしたら、右手と右足の右半身、次に左半身というように、半身ずつ前に出して歩いていました。この動きは体をねじりませんからね。きものは着くずれにくいわけですよ。というより、そもそもきものは、体をねじらない日本人特有の動きに添った衣服なんですよ。」

* 下駄での歩き方に関しては、
146ページ参照。

といいながら、実際に歩いてみせてくれた甲野さんの歩き方は、じつに静かでさりげない感じ。体の軸がまったく揺れない。静かに体重を移動させていく感じだ。

この歩き方こそ、通称ナンバ。きもの好きの間で、ひそかに囁かれているあのナンバである。

ナンバの語源は諸説あり*、伝統芸能研究家・演出家の武智鉄二（一九二二〜八八）も評論集『伝統と断絶』で考察している。動き自体は鎌くわなどを使う農耕民族の日本人に特有なものだといい、結局、明確な根拠にはたどりつかないのだが、少なくとも日常にきものを着ていた時代の歩き方だということは確からしい。

「明治時代まで、日本人は手を振って歩かなかったと思いますね。武士や飛脚ひきやくなど特別に走る訓練をしていた者以外は走れなかつたでしょう。西南の役では、徴用で集められた庶民が官軍の兵士に仕立てられたわけですが、なんの訓練も受けていなかったから、走る訓練を受けていた薩摩兵に追いつかれて斬られたそうです。

明治一二（一八七九）年に陸軍の大演習をやったときも、当時の普通の日本人は、走れない、急に曲がれない、匍匐はふく前進もできない、ということがわかって、それで西洋式運動で大改革をしたという話です」

* 甲野善純 中島章夫共著『縁（えにし）の森 武術稽古研究会 松聲館の歩み（合巻）』コーズ（一九九七年）で、高弟の中島さんが「ナンバ考」として詳細を記述。齋藤孝『身体感覚を取り戻す（NHKブックス 二〇〇〇年）』でも、「歩くという技」の項目で言及している。

* 武智鉄二『伝統と断絶』（風涛社 一九六九年）。

甲野さんの話を聞くにつれ、興味はますますつのる。和と洋両方のライフスタイルを選ばざるをえなかった日本の庶民は、正座もできなくなるかもしれない、それ以前に歩き方さえも日本固有の動きを忘れ去ってしまった。生活スタイルが違ってきたのだから当然といえるのかもしれないが、すべてを捨ててしまってもいいものだろうか。

と、こんなふうに考えるとき、きものを着ることで、少しでも自分のアイデンティティに想いを巡らせられたら、と思う。

「小よく大を制す」を可能にするものは

もう少し、甲野さんにナンバ歩きのことを聞いてみよう。

「ウエイト・トレーニングなど西洋式身体の使い方は、筋肉を重視する『筋主骨従』。それに対して日本の身体操法は、「コツをつかむ」という言葉にも表れているように『骨主筋従』。骨が正しい位置にありつづけるように、筋肉を使わずです。だから、むやみに筋肉をつけても邪魔になるだけなんですよ。」

西洋式筋主骨従は、体が大きくて力の強い人間が有利。ところが、日本式骨主筋従なら、「小よく大を制す」との箴言しんげんもあるように、小柄な老人が指一本で大男を投げ飛ばすという術も使えるのだという。

* 正座そのものの考察もしたいがここでは、膝の曲がりを防ぐため正座をさせないような考え方を指す。

* 体格や筋力に頼らない「術」の例は杖拳じょうけんにいとまがない。剣寄、松林左馬助さだまさけ（さまのすけ）は柳の枝を投げ上げ、それが水面に落ちるまでの間に、二三に斬ることができた。

これは、身体をねじらないナンバの動きがあったからこそ。甲野さんの説明によれば、ねじってある縄（西洋式）は強いけれども、一本一本の繊維は動かない。けれども、ねじっていない一本ずつの繊維（日本式）は組み合わせがたくさん可能で、一本ずつの動きができて運動できる。つまり、身体の微小な部分を個々に動かす感覚を身につければ、じつに多様な動きができることになる。

文章にするとわかりにくいと思うが、実際に甲野さんと手を合わせてみると、これが実感となる。甲野さんが「体を割る」と表現する動きをすると、まったくなんの気配もなしに、突然としかいいようのない瞬間の動きになるのだ。いままでまったく経験しなかった動き、ということだけはわかるのだが、なにがなんだかわからないまま、こちらは倒れているフシギ。えっ、これはいったいなんなのだろう、と面白いつつは不謹慎なのだろうけれど、人間の身体を日本的に追究していくのは、とても興味深い。

そんな身体の動き、使い方と、きものは運動しているのだ。たしかに、いまの時代、きものはファッションだが、こうした「深さ」をぜひとも見つめてほしい。

* 甲野さんが武術を始めたのは、「人の運命は決まっているのか、それとも自由なのか」という人間の在り方に対する疑問からだったという。